

結社誌を訪ねて

中原 修子

奥山の消印つけて色鳥来

森野 稔

「森」二月号

秋の景を色鳥に託して詠んだ味わいのある主宰作品です。この作品は単に、「山奥に住む友人から手紙が来ました」という意趣に「色鳥来」という季語を組み合わせた二物衝撃の句ではないと考えます。そう考えると、消印の付いた手紙の印象が前面にでてしまい、「色鳥来」という季語が添え物のようになってしまいうからです。

この作品の中には、「色鳥」以外に、深い秋の気配を帯びた「奥山」という語が置かれています。奥山という語からはすぐに、古今和歌集や百人一首でおなじみの、猿丸太夫の「奥山に紅葉踏みわけなく鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」という和歌が自然と思い出されます。奥山の地面いっばいに紅葉や黄葉が敷き詰められ、悲しい恋に身をやつすような鹿の声も聞こえます。源流のせせらぎ、葉を落とすつある白い木肌の斑、秋風の過ぎる様子、そのようなものをすべて奥山は刻印として鳥に刻み込んで送り出します。

「奥山の消印」という措辞はまことに妙を得ており卓抜です。と同時に、消印は徐々に色褪せていくものです。これからやってくる厳しい冬の予感もほのかに匂わせています。たった十七音から

豊かな秋の情景と色鳥の来た喜びと冬の予感まで感じさせる作品です。

「森」という結社誌には、最後の方に「選後評」という森対談が書かれてあり、二月号では主宰が六句を取り上げて講評されておられます。「(この句は)身近なものを何でもなくように詠む手本です。『むやみやたらに形を整えることにこだわってはいけない。』という風に丁寧に解説しておられます。また「(投句の)誤字や脱字は恥ずかしいと思ってほしい。」と苦言も呈しておられ、こちらも身の縮まる思いで拝読させていただきました。

スノーボーの少年の斬りゆくものは

渡辺 純枝

「濃美」二月号

ミラノ・コルティナ冬季五輪が終了しました。ハーフパイプでは空中を舞い、ビッグエアでは雪の斜面で速さや高さを競い、観衆を魅了しました。本句は「何を斬るのか」が鑑賞の核心になります。下五の後が鑑賞者に委ねられているため、解釈の自由度が高い作品です。

少年が斬りゆくものを三つ挙げてみます。第一は、ゲレンデの雪や風、そして重力といった自然の力です。地上の法則に逆らい、束縛から解き放たれたいという若者の衝動が感じられます。第二は、青少年期の揺らぎや既成の固定観念、平凡な日常といった心理的葛藤でしょう。それらを切り裂き、自らの存在を確かめようとしているのかもしれない。そして第三に、最も斬りたいものは「時間」ではないかと考えます。まだ十分な社会的役割を担っ

ていない若者が、未来という無垢の面に自らの軌跡を刻み、名付けられていない未来を自身の身体で意味づけながら斬り開いていく姿が浮かびます。本作品は、少年のスノーボードを通して、自然・観念・時間という三層を貫く切断のイメージを提示しています。

セーターをたたみ罪ある影を消す

衣川 次郎

「青岬」一月号

本作品は新年号であり、表紙裏には衣川主宰の年頭のご挨拶文が掲げられています。「青岬」には多くの非会員も参加し、俳句は楽しい、少しでも『生きている証』を後生に残していこうと努力しています。」とあります。続いて同人会長の「生きている証を詠む。俳句は庶民詩である。」という言葉が記されています。日常のなかに身を置き、確かな実感を一句に託す姿勢が誌面に通底しているように思われます。第五十九回現代俳句全国大会で優秀作品に選ばれた「尻という平和が並ぶ潮干狩」にも、その自在な視線と表現の新鮮さが見られました。

本句はそれとは趣を異にし、「セーター」という身近な冬の衣に「罪ある影」という重い語を重ねてあります。罪の結果としての「罪の影」ではなく、「罪ある影」と言い切ることで、人の内に潜む暗部が静かに示されています。人は多かれ少なかれ後ろめたさや小さな背徳を抱えて生きています。身体を残すセーターを平らに伸ばして畳むとき、立体を平面へと還元するその所作に、己の影を消そうとする心理が映ります。もつとも、影が見えなくなつたとしても、罪そのものが消えるわけではありません。

柔らかな毛糸の温もりと対照をなす「罪ある影」、その緊張が一句に深い余韻をもたらししています。

天の川とびとびの刻ながれ着き

花谷 清

「藍」二月号

巷では、わかりやすい俳句が良いと言われます。また、難解な語を用いると、言葉の暴力だ、あるいは独断的だと非難されることもあります。確かに、理解しややすい作品は多くの共感を呼びます。しかし、単純明快で景色の見えやすい作品ばかりでは、どこか似通って感じられ、物足りなさを覚えることもあります。

「掲句は、言葉そのものは平明でありながら、深い思索へと導く一句です。十七音という限られた器の中で、作者と読者を結ぶものは言葉だけです。その意味が一義的に定まらないとき、読者には自由に解釈する余地が与えられます。

人生の一瞬一瞬を「点」として捉え、その連なりを時間と考えると、「点とは何か」という問いが生まれます。数学的には点は面積を持たず、ただ位置を示すのみです。私たちは時間を連続した流れとして感じますが、実際には意識できる瞬間はごくわずかで、記憶もまた断片的です。人生とは、とびとびの時間の集積なのかもしれません。天の川もまた、連続した光の帯のように見えながら、無数の星という点の集まりです。時間の点、記憶の点、星の点、その重なりを一句に凝縮したところに、この作品の魅力があると考えます。

（筆者住所 〒310-0853 茨城県水戸市平須町一八二八一五七二）